

岩殿山城(岩殿城)(県史跡)(大月市賑岡町)

岩殿山城（いわどのやまじょう）は、山梨県大月市賑岡町に所在する城郭。標高 634 メートルの岩殿山に築かれた山城。

甲斐国都留郡の国衆小山田氏の居城とされ、戦国時代には東国の城郭の中でも屈指の堅固さを持っていたことで知られた。山梨県指定史跡（指定名称は「岩殿城跡」）^[1]。

沿革

『甲斐国志』に拠れば、岩殿山には大同元年（806 年）開創と伝わる天台宗寺院の円通寺が存在し、円通寺は岩殿山の南東麓に観音堂や三重塔、新宮などの伽藍が配され、「岩殿権現」「七社権現（明神）」と呼ばれた。13 世紀に入ると天台系聖護院末の修験道の場として栄えている。

16 世紀になって大名の領国支配制が成立すると甲斐守護武田・郡内領主の小山田両氏の支配を受けるようになった。

築城時期は不明であるが、文化年間に編纂された『国志』では小山田氏による谷村館の詰城説を取っている。『国志』に先立つ天明 3 年（1783 年）の萩原元克『甲斐名勝志』でも同様の見解が取られており、江戸後期には小山田氏による要害説が認識されていたと考えられている。一方で、近年は岩殿山城を谷村館の詰城とするには距離が離れすぎていることから、武田氏による相模との境目の城として築かれたと考えられている。

大月は武蔵国など関東地方へ至る街道が交差する地点に位置し、甲府盆地と異なる地域的まとまりをもっていた。小山田氏は初め武田氏に対抗していたが、永正 6 年（1509 年）武田氏の傘下に入った。その後は軍事的に武田氏が相模の北条氏や駿河の今川氏、武蔵の上杉氏らと争った際の衝突地点となり、国境警備の役割を果たした。

東西に長い大きな岩山をそのまま城にしており全方面が急峻で、南面は西から東までほとんどが絶壁を連ね、北面も急傾斜である。東西から接近できるが、それも厳しい隘路を通らなければならない。各種の防御施設が配されたが、天然の地形のせいで郭も通路も狭く、大きな施設の余地はなかった。周囲には集落や武家館が点在していたと考えられている。

天正 10 年（1582 年）に織田軍が甲斐に侵攻したときに小山田信茂は織田方へ寝返り、岩殿山城へ落ち延びてくる武田勝頼を郡内に入れず、進退に窮した勝頼は天目山で自害した。『理慶尼記』では信茂が勝頼に籠城を薦めた岩殿山城を「みつからか在所」と記している。武田家を滅亡させる事に深く関わった小山田信茂だがこの戦いののち、織田信長により処刑された。

江戸に武家政権を成立させた徳川家康は、幕府の緊急事態の際に甲府への退去を想定しており、江戸時代にも岩殿山城は要塞としての機能を保った。

岩殿山

相模川水系の桂川と葛野川とが合流する地点の西側に位置する。頂上の南側直下は鏡岩と呼ばれる礫岩が露出した約 150 メートルの高さの崖で、狭い平坦地を挟んで、さらに急角度で桂川まで落ち込んでいる。大月市街地からも近く、大月駅からも間近にその姿を眺めることができる。

山頂までは大月駅から徒歩で約 1 時間。山頂からは富士山が望め、山梨百名山、秀麗富嶽十二景にも選定されている。

山の南側と桂川の間狭い場所に中央自動車道が通っている。1972 年 2 月末頃には岩殿山で大規模な地滑りが発生、同年 3 月 21 日から中央自動車道の相模湖インターチェンジと大月インターチェンジの間が全面通行止めとなった。仮インターチェンジを設けるなどした後、7 月 22 日に通行止めが解除されるまで、通行止めは 123 日間に及んだ。

Wikipedia による

